日本語の右方移動に関する語用論的制約の習得 –中国語母語話者の場合–

鈴木 孝明
京都産業大学

１．はじめに

本研究では日本語の右方移動 (right dislocation) を対象として、第二言語習得における転移 (transfer) の影響を調査した。右方移動を含む文は、統語論的には非正規語順の文だと捉えられ、学習者が教室で明示的に学ぶ機会は決して多くないと考えられる。しかしながら、子どもに対する親の語りかけに右方移動を含む文は決して稀ではないことが知られている (Nomura, 2008; Sugisaki, 2008)。もしもこれが非母語話者との対話にも当てはまるなら、日本語学習者は自然環境で右方移動に関するインプットを受け取り、これを利用していることが考えられる。しかしながら、第二言語習得研究において日本語の右方移動の習得はこれまでほとんど扱われることがなかった。そこで本研究では、日本語学習者の右方移動を対象として、第二言語習得における日本語の非正規的語順の習得に関する特徴を探った。

本研究の目的は、中国語を母語とする日本語学習者を対象として、第二言語習得における日本語の右方移動が習得可能なのかどうかを探ることである。中国語母語話者の場合、日本語の右方移動の習得には統語的制約と語用論的制約に関する２つのタイプの転移が起こる可能性が考えられる。これらの制約が学習者にどのような影響を及ぼすのか明らかにする。

２．基本語順と右方移動

２．１．統語的制約としての基本語順

自然言語において、動詞と直接目的語の順番には２通りの可能性しかない。動詞が直接目的語の前にくる場合（VO）と動詞が直接目的語の後にくる場合（OV）である。さらに、すべての自然言語に基本語順が存在すると仮定した場合、世界中の言語は VO 型か OV 型のいずれかということになる。原理とパラメータのアプローチ （Chomsky, 1981, 1986 など）では、主要部パラメータ (head parameter) がこれを決定すると考えられており、主要部である動詞が補部である直接目的語に先行する主要部前置型が英語や中国語などの VO 型で、この逆の主要部後置型が日本語や韓国語などの OV 型ということになる。このような統語的な制約は、文の文法性を決定づけるものである。よって、日本語の場合 OV 語順の(1)や(2)は文法的だが、(3)の VO 語順は非文法的ということになる。

(1) 太郎は本を読んだ。
(2) 本を太郎は読んだ。
(3) *太郎は読んだ本を。

久野 (1973) は統語的な特徴として、日本語は「…終助詞以外のいかなる要素も動詞の後に現われ得な

いという点で、絶対的な SOV 語であると言うことができる」(p. 3)と述べており、上記(3)の文を非文法的だと判断している。しかしながら、日本語の語順に関する容認度は、統語的な制約からだけでは捉えられない側面がある。

２．２．語用論的制約としての右方移動

日本語の VO 語順に関する非文法性は、文脈無しでの書き言葉に限られるようである。上記(3)の文も、「両親が息子の太郎に買い与えた本を話題とした会話文」という文脈で(4)のようにすると非文法的とは言えなくなるだろう。

(4) 太郎はもう読んでしまったらしいね、あの本を。

このような VO 語順を含め、本来は動詞よりも前（左の位置）に置かれる構成素が動詞よりも後（右の位置）に現れる現象を右方移動 (right dislocation) とよぶ[1]。右方移動によって動詞の後に現れる要素は直接目的語に限らない。以下の(5)〜(7)は高見（1995, p. 219）によるものだが、それぞれカッコに示した要素が動詞の後に現われている。

(5) もう読みましたよ、その本は。（トピック）
(6) ついに来たぞ、あこがれのパリに。（場所を表すに格を伴う句）
(7) こんなすばらしい写真が撮れましたよ、このカメラで。（手段を表す付加部）

これらの例からわかるように、右方移動の対象となる要素は、補部や付加部の別、また文法関係といった統語的側面によって規定されるものではない。しかしどのような要素でも、右方移動の対象となるわけではない。下記の(8)〜(11)は非文法的な文として先行研究で提示されたものである。

(8) *太郎は生まれました、1960 年に。　（高見, 1995, p. 225）
(9) *彼はお酒を飲めない、一升は。　（高見, 1995, p. 227）
(10) *世界一の大都会だよ、東京が。　（久野, 1978, p. 70）
(11) *昨日買ったワインを飲むよ、ジョンが。（Endo, 1996, p. 3）

これらの文に共通することは、右方移動の対象となる要素が、比較的重要度の高い新情報 (new information) だということである。指示詞を伴うことなく、想定される文脈からも既に明白となってい

[1] ここでの「動詞」とは、より正確には述語を指す。また、「移動」という用語は、動詞の後に現れる要素が移動操作の結果としてその位置に現れることを示唆しているが、この点に関しては多くの議論が存在することから (Tanaka, 2001 など)、本論ではその詳細には立ち入らず、この現象を表す名称として「右方移動」という用語を使用する。

る旧情報だとは考えにくい。これに対して(5)や(7)の文では、右方移動の対象となる要素に指示詞が使われている。指示詞が使用されている要素が常に旧情報を表すことにはならないが、 (5)〜(7)の文では想定される文脈からも、右方移動の対象となっている要素が話し手と聞き手の間で既に共有されている旧情報である可能性が高いと考えられる。右方移動はこのような旧情報に適用される随意的な現象であり、重要度の高い新情報には適用されないという機能的・語用論的な制約が存在すると考えられている（久野, 1978 ; 高見, 1995 など）[2]。このことは、下記(13)と(14)に示す疑問詞を用いた文が常に非文法的となることからも明らかである。

(12) 先生が学生をほめるんですか。

(13) *学生をほめるんですか、誰が。

(14) *先生がほめるんですか、誰を。

(12)は OV 語順の疑問文で、この文の主語と直接目的語にそれぞれ疑問詞「誰」を使用して右方移動を適用したものが(13)と(14)である。これらの文で使われている「誰」は疑問詞なので、当然、未知の情報、すなわち新情報ということになる。しかも、疑問文の機能からすれば、「誰」の情報は話者にとってもっとも重要な情報ということになる。よって、(13)の主語、(14)の直接目的語という文法関係に関わらず、重要度の高い新情報を右方移動の対象としていることで、これらの文は非文法的となる。

右方移動は日本語に限られるものではない。中国語にも同じような現象が見られることが知られている（Cheung, 2009; Lee, 2013; Lu, 1980 など）。しかし、中国語の基本語順は日本語と異なるので、日本語と同じ語順の文に適用され、日本語と同じ語順に変化するわけではない。中国語の基本語順は主要部前置型の VO である。よって、直接目的語は基本語順において既に動詞の後に位置するため、これが右方移動の対象となることはない。これに対して、基本語順において動詞よりも前に現れる主語は右方移動の対象となり得る。(15)は広東語の例、(16)は標準語の例である。

(15) Wui maai jat bou dinnou aa3, keoi.
will buy one Cl computer SP he
“He will buy a computer.” (Cheung, 2009, p.198)

(16) Lai-le ma, ni gege?
come-Perf Q you elder brother
“Has your brother come?” (Lu, 1980, Cheung, p. 198 に引用)

[2] この制約を捉える言語学的な名称として「機能的（機能文法的）」、「語用論的」、「情報構造的」などが考えられるが、その区別にこだわることなく、ここでは非統語的な制約として、以後は「語用論的」という用語を使用する。

これらの文では、本来は文頭に現れるべき主語が、文末の要素として現われている。その結果、(15)は VOS 語順、(16)は VS 語順となっている。日本語と表面的な語順は異なるものの、中国語でも右方移動は旧情報に適用される随意的な現象であり、重要度の高い新情報には適用されないという語用論的な制約が存在すると考えられている（Lee, 2013）。

以上のような中国語と日本語の語順に関する特徴は表１のようにまとめることができる。これに基づいて、中国語母語話者の日本語習得に関していくつかの予測を行う。

表１：動詞と直接目的語に関する中国語と日本語の特徴

	日本語	中国語
基本語順	OV	VO
右方移動	VO	（VOS、VS）

*カッコに示した中国語の語順は主語を含めた場合

動詞と直接目的語の語順に関して、２つのタイプの転移が働く可能性が考えられる。その１つは統語的な転移である。もしも中国語の基本語順である VO 語順が日本語に転移すれば、学習者は日本語においても誤った VO 語順を容認すると考えられる。これは負の転移として現れることになる。もう１つは、語用論的な転移である。すなわち、もしも中国語における右方移動に関する規則が日本語に転移すれば、学習者は日本語においても右方移動が適用された VO 語順の文を容認すると考えられる。これは正の転移の結果である。これら２つの転移はともに日本語 VO 語順の容認という予測をするため、これらの区別をすることはできない。そこで本研究では、直接目的語に疑問詞を使用しない疑問文(17)と疑問詞を使用する疑問文(18)を用いて情報の新旧をコントロールすることで語用論的制約を操作し、２つのタイプの転移の影響を調査した。

(17) 石田さんは書きましたか手紙を。
(18) *石田さんは書きましたか何を。

もしも中国語からの統語的な転移が起これば、学習者は(17)の文も(18)の文も一様に容認してしまうはずである。これに対して、語用論的な制約が働けば、旧情報が右方移動された(17)の文は容認するが、新情報が右方移動された(18)の文は容認しないと予測できる。これら VO 語順の文に加え、OV 語順の文の容認度を実験によって調査した。

３．実験

３．１．被験者

中国語母語話者の日本語学習者 27 人が実験群として実験に参加した。学習者の日本語学習平均年数は２年９ヶ月（範囲：２年０ヶ月～５年０ヶ月）で、日本での合計滞在期間は平均２年２ヶ月（範囲：

２ヶ月～４年４ヶ月）であった。全員が日本の大学への正規留学生で、大学で日本語の授業を受講していた。日本語能力試験のレベルに基づいて、N1 保持者 12 人を高スコアグループ、N2 レベル保持者 15 名を低スコアグループに分けた。統制群として 20 人の成人日本語母語話者が同じ実験に参加した。

３．２．材料と手続き

実験文は４タイプで２つの要因を統制した。１つの要因は語順（OV／VO）で、もう１つが直接目的語に付く疑問詞の有無（疑問詞あり／疑問詞なし）である。実験文の例を表２に示す。これら４タイプの文を各４文（４トークン）準備し、これにディストラクターの 10 文を加えた 26 文をテストした。実験文に使用した語彙は、学習者が日本語の授業で使用していたテキスト「初級日本語げんきI 第２版」と「初級日本語げんきII 第２版」で使われているものに限った。固有名詞はこの限りではなかったが、すべての漢字にはルビをつけて、学習者に読めるようにした。各タイプに使用される語彙のカウンターバランスをとって２セット準備し、それぞれを約半数の被験者に割り当てた。

表２：実験文

語順	疑問詞あり	疑問詞なし
OV	石田さんは何を書きましたか。	石田さんは手紙を書きましたか。
VO	*石田さんは書きましたか何を。	石田さんは書きましたか手紙を。

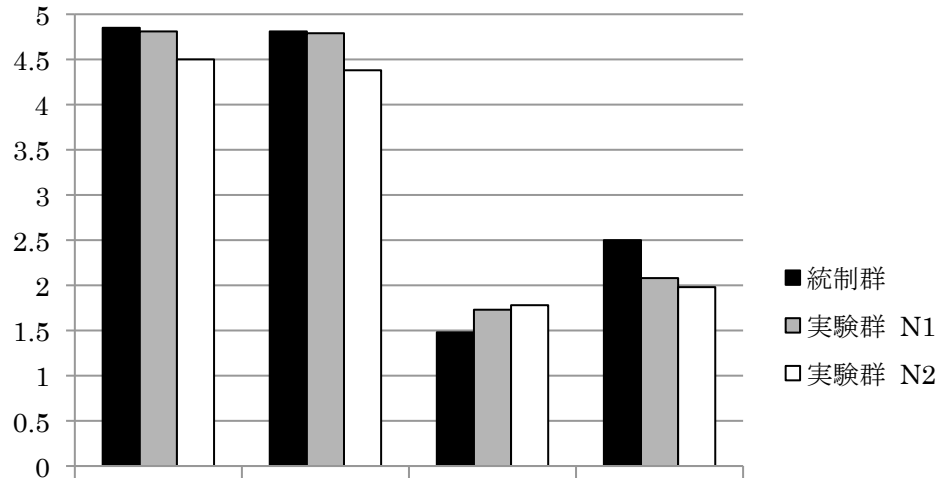
実験方法は文法性判断課題 (grammaticality judgment task) によるもので、配布された用紙に各自が自分のペースで記入する形で行われた。最初に実験者による説明が行われ例題に取り組んだが、同じことが配布用紙の表紙にも書かれており、被験者はこれを読むように指示された。課題の方法は、与えられた文が日本語として正しいかどうかを判断するもので、５つの選択肢からどれか１つを選んで丸を付けるというものである。選択肢は「１：間違っている」、「２：多分間違っている」、「３：どちらともいえない」、「4：多分正しい」、「５：正しい」の５段階で、これらの日本語に中国語と英語を併記した。配布用紙の最後には、母語、日本語学習歴、日本滞在歴、日本語能力試験レベルなどの個人情報を記入する項目を設けた。

３．３．結果

実験群と統制群の４つの文タイプに対する容認度の平均値を算出した。その結果は図１に示す通りである。反復測定の分散分析により、実験群の２グループと統制群の直接比較を行ったところ、グループの効果 ($F(2,44) = .812, p = .451$) およびグループの要因を含む交互作用に有意差は見られなかった ($p > .05$)。また、語順の効果 ($F(1,44 = 289.126, p < .0001$)、疑問詞の有無の効果 ($F(1,44 = 6.591, p < .05$) ともに有意で、これらの交互作用も有意であったため ($F(1,44 = 14.967, p < .0001$)、単純主効果の検定をおこなった。その結果、疑問詞がある場合も無い場合も、OV 語順の方が VO 語順よりも容認度が有意に高く ($p < .0001$)、OV 語順においては疑問詞の有無に関する効果はなかったが ($F(1,46 = .687, p$

= .412)、VO 語順では疑問詞が無い場合の方がある場合よりも容認度が有意に高かった (F(1,46 = 14.619, p < .0001)。

これらの結果は以下３点に集約できる。第１に、実験文の容認度に関して学習者の日本語習熟度レベルは関係なく、実験群は統制群と同じような判断をおこなっていた。第２に、OV 語順の方が VO 語順よりも容認度は常に高く、このことは疑問詞の有無に影響されなかった。第３に、VO 語順に関しては、疑問詞が無い場合はある場合と比べて容認度が高かった。



	OV 疑問詞	OV	VO 疑問詞	VO
統制群	4.85	4.81	1.48	2.50
実験群 N1	4.81	4.79	1.73	2.08
実験群 N2	4.50	4.38	1.78	1.98

図１：実験文に対する容認度の平均

４．議論

実験の結果から、中国語母語話者の日本語学習者は、右方移動に関する語用論的な制約を習得していると考えらえる。また、学習者の習熟度別グループが実験文の容認度に影響を及ぼさなかったことは、右方移動の習得は日本語全般の習熟度とは関係がないことを示唆している。本研究での対象は日本語能力試験の N1 と N2 レベルの保有者なので、初級者というわけではない。しかし、学習者の平均学習期間や日本での平均滞在年数から推測すると、日本語母語話者に近い学習者というわけでもないと思われる。よって右方移動の制約は、比較的学習の初期段階で容易に習得される可能性があると考えられる。

この習得にかかわるのが、２つのタイプの転移である。語順に関して統語的な転移が起これば、負の転移として学習者は VO 語順を一様に容認してしまう可能性があった。しかし、学習者は日本語母語話者同様、VO 語順の文を OV 語順の文のように容認することはなかった。これは語順という統語の基本的な制約には、転移が起こらないことを示しているようである。また、語用論的な転移に関しては、これが正の転移として右方移動の判断に用いられた可能性がある。日本語と中国語では右方移動

の表れ方が異なる。中国語は基本語順が VO であるため、右方移動が適用されるのは、直接目的語以外の構成素ということになる。これに対して、本研究で調査した日本語の右方移動は直接目的語への適用である。このような違いがあるにもかかわらず、学習者が日本語の右方移動を統制群と同様に判断したのは、表面的な語順に基づく判断を行ったからではなく、右方移動に関する語用論的な制約を日本語に適用して判断した結果であると考えられる。

右方移動にかかわる語用論的な制約とは、新情報を表す要素は右方移動の適用を受けないということである。実験では直接目的語に疑問詞を用いることで、これを新情報とし、疑問詞を用いない場合と区別されるのかどうか確かめた。統制群も実験群もこの違いに敏感であったが、果たしてこれが情報の新旧に関しての判断なのか、または、単に疑問詞の有無によるものなのかは、本実験からはわからない。これを確かめるためには、疑問詞の有無以外の指標を用いて情報の新旧を制御し、これが右方移動の容認度の判断に用いられるのかどうかを調査する必要がある。

また、本研究では右方移動に関する語用論的制約について、母語からの転移が起こる可能性を前提とした議論を行ってきた。しかし、目標言語で母語と同じ制約が働くからといって、ここに必ずしも転移を想定する必要はない。論理的には、母語からの転移ではなく、目標言語の習得過程において直接的に語用論的な制約を習得する可能性も考えられるからである。この調査のためには、右方移動に関する語用論的な制約がない言語を母語とする学習者を対象とすることが考えられる。しかしながら、情報の新旧にかかわる語用論的、情報構造的な制約は、言語運用の本質にかかわる普遍的なものなので（Clark and Haviland,1977）、どの言語を母語とする日本語学習者でも何らかの形で情報の新旧に敏感であることが考えられる。

５．結論

本研究では、日本語の右方移動を対象として、中国語母語話者における統語的制約と語用論的制約の習得を探った。学習者は、統語的制約に関しては母語からの負の転移を起こすことはなかった。また、語用論的制約に関しては、表面上は異なる語順をもつ日本語にも、中国語で働く制約を適用させて、日本語の右方移動を含む文を日本語母語話者とほぼ同様に容認することができた。ここに日本語の習熟度による影響がないことから、右方移動に関する語用論的制約は、学習の比較的早い段階で容易に習得されると考えられる。

文献

Cheung, Lawrence Yam-Leung (2009). Dislocation focus construction in Chinese. Journal of Asian Linguistics 18, 197-232.

Chomsky, Noam. (1981). Lectures on government and binding. Dordrecht: Foris.

Chomsky, Noam. (1986b). Knowledge of language: Its nature, origin, and use. New York: Praeger.

Clark, Herbert, and Haviland, Susan. (1977). Comprehension and the given-new contract. In R.O. Freedle (Ed.), Discourse production and comprehension (pp. 1-40). Norwood, New Jersey: Ablex Publishing Corporation.

Endo, Yoshiko. (1996). Right dislocation. Formal Approaches to Japanese Linguistics 2 (MIT Working Papers in Linguistics 29), 1-20.

久野暲 (1973). 『日本文法研究』大修館書店

久野暲 (1978). 『談話の文法』大修館書店

Lee, Kent. (2013). Right dislocation in Chinese: Syntax and information structure. Korea Journal of Chinese Literature 3, 3-50.

Lu, Jian-ming. (1980). Hanyu kouyu jufali de yiwei xianxiang [Dislocation in the syntax of colloquial Mandarin Chinese]. Zhongguo Yuwen 1, 28-41.

Nomura, Jun. (2008). Japanese postposing: The role of early discourse pragmatics. Unpublished doctoral dissertation, University of Hawaii at Manoa.

坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2011). 『初級日本語げんき I・II　第２版』ジャパンタイムズ

Sugisaki, Koji. (2008). Early acquisition of basic word order. Language Acquisition 15, 183-191.

高見健一 (1995). 『機能的構文論による日英語比較 –受身文、後置文の分析–』くろしお出版

Tanaka, Hidegazu. (2001). Right-dislocation as scrambling. Journal of Linguistics 37, 551-579.